

# 障がい者スポーツボランティアに対する意識調査

A study on Opinion Poll about for Disabled sports volunteer

体育学部健康科学科

小玉京士朗

KODAMA, Keijiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

早田 剛

HAYATA, Gou

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

相澤 徹

AIZAWA, Toru

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部健康科学科

河合洋二郎

KAWAI, Yojiro

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

しんかま駅前整形外科

村重 良一

MURASHIGE, Ryoichi

Shinkama-ekimae Orthopedic clinic

**Abstract** : With the aim of studying how to promote disabled sports, we conducted a questionnaire survey of 100 male and 33 female able-bodied students as baseline research to investigate their motives for volunteering to help with sports for the disabled. We found that 1. ninety-five percent of students had not volunteered to help with sports for the disabled; 2. the percentage of students who were not interested in this kind of volunteering was significantly lower than that of students who were interested ( $P < 0.01$ ); 3. the most common reason for students not volunteering was that they had no opportunity; 4. their motives for participation could be classified into six categories; and 5. their primary motive was a desire to contribute to society. These results indicate that, as a way of further promoting disabled sports, it is important to increase the number of volunteer activities available and provide students with opportunities to experience volunteering.

**Keywords** : Disabled sports, volunteer, Motivations

## I. 背景

障がい者スポーツの社会普及は、大学や専門教育機関をはじめ、ボランティア従事により拡大しつつある。しかしながら、障がい者スポーツを取り巻く環境は、未だ充足しているとは言い難いのが現状である。

井上ら<sup>1)</sup>は、特別支援学校高等部に通う障がい児の保護者に対してスポーツ参加に関するアンケート調査を実施した結果、学校では94%の障がい児が体育の授業に「必ず、あるいはほとんど参加していた」が、学校以外で定期的なスポーツを行っていたのは6%で

あったと報告している。その理由として、障がい児やその保護者は、障がい者スポーツに関心があるにもかかわらず、「機会がない」、「子どもに何ができないかわからない」、「指導者がいない」などの理由により地域でのスポーツ活動に参加していなかったと述べている。

2007年に開学したIPU・環太平洋大学は、スポーツを通じて障がい者を支援する障がい者スポーツ指導員(初級)資格が取得可能な認定校の一つである。資格取得には、半期15コマで開講される障がい者スポーツ論の単位修得と毎年県内で実施される障がい者スポー

ツのボランティア活動に1回以上従事する事が資格取得条件となる。毎年多くの学生が資格取得を目指し、受講およびボランティア活動に従事している。しかしながら、大学在学期間において障がい者スポーツのボランティア活動へ複数回参加する学生は少なく、その多くは単発的なボランティア活動となっている。

毎年、継続的に開催されるスポーツイベントの背景には継続的に参加するボランティア従事者の存在が不可欠であり、その存在が実施するスポーツの普及活動に対しても重要な役割を担う。しかしながら、ボランティア従事者に目的意欲や実施目標が無くとも各種スポーツへのトラブルの発生のみならず参加する選手に対して多大な影響を与える可能性がある。

そこで本研究は、障がい者スポーツ論履修学生に対し障がい者スポーツボランティアの参加動機に対する意識調査を実施し、障がい者スポーツの普及方法を検討する基礎研究として行った。

## II. 方法

対象は、2015年前期に障がい者スポーツ論を履修し

た学生133名(男子100名、女子33名、平均年齢 $18.1 \pm 0.5$ 歳)とした。障がい者スポーツボランティアの参加動機に対する意識調査は、田引<sup>5)</sup>の先行研究で用いられたアンケート項目に独自で作成した設問を加えたアンケート用紙を使用した。実施期間は、受講講義開始日とした。調査項目は、1. 障がい者スポーツのボランティア活動について、2. 障がい者スポーツのボランティアに対する参加動機について(質問項目1~29)とした。また、各質問項目については「強く思う(5点)」、「すこし思う(4点)」、「どちらともいえない(3点)」、「あまり思わない(2点)」、「全く思わない(1点)」の5段階尺度を用いて回答を求めた。アンケート調査を実施する前に今回の調査の趣旨を説明し同意を得て調査を実施し、その場で回収した。アンケート用紙未記入については除外した。

分析処理は、Excel統計2015を使用した。調査項目1. の障がい者スポーツのボランティア活動については、多重比較検定(Tukey-Kramer法)を用いた。また、調査項目2. 障がい者スポーツのボランティアに対する参加動機については、障がい者スポーツのボランティアについての29項目の質問群に対し主成分分析

表1. アンケート調査内容(障がい者スポーツについて)

**あなたについてお尋ねします。当てはまる数字や項目に○を記入して下さい**

学籍番号： 学科： 学年： 1・2・3・4年  
 氏名： 性別： 男・女 年齢： 歳

**障がい者スポーツの経験についてお尋ねします。当てはまる項目に○を入れて下さい。また、ご自由な御意見をお聞かせ下さい。**

1. 今まで障がい者スポーツにおけるボランティア活動を実施した経験がある。  
 あり なし

なしと答えた方へ：その理由について当てはまる項目に○を入れて下さい

- 1-1.機会がない  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
- 1-2.時間がない  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
- 1-3.知識不足などで自信がない  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
- 1-4.関心がない  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない

その他の理由があればお書きください。

[ ]

2. あなたが在校中に障がい者のスポーツについてもっと知識を得たいと思うか  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
3. あなたが在校中に障がい者のスポーツについての経験や、実際に行う機会があれば良いと思うか  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
4. あなたが在校中に障がい者のスポーツボランティアの参加の機会がある場合参加したいと思うか  
 強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない

表2. アンケート調査内容（ボランティア参加動機について）

障がい者スポーツに対するボランティアについてお尋ねします。ボランティアに参加しようと思う動機について当てはまる項目に○を入れて下さい。

1. 他人の役に立ちたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
2. 活動を通じて社会の役に立ちたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
3. ボランティア活動に興味があるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
4. プログラム運営に役立ちたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
5. 大会を盛り上げたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
6. ボランティアの必要性を他の人に理解してもらいたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
7. 自分の知識や経験を活かしたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
8. スポーツに関心があるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
9. スポーツ活動を支援したいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
10. 身につく技術や技能が得られるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
11. プログラムに興味があるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
12. 新しい知識や経験を得たいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
13. 多くの人と出会いたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
14. 社会的な視野を広げたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
15. 自分自身が成長したいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
16. ストレス解消になるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
17. 気分転換になるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
18. 余暇時間を有効に活用したいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
19. 活動を通じて自分を表現できるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
20. 参加者（アスリート）に関心があるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
21. 障害者に関心があるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
22. 参加者（アスリート）と交流することが出来るから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
23. 参加者（アスリート）活動を支援したいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
24. 学校や地域団体に参加することになったから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
25. 何らかの報酬を得たいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
26. 記念品などがもらえるから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
27. 他人に認めてもらいたいから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
28. 競技団体より推薦されたから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない
29. 友人や知人に強く頼まれたから  
強く思う・すこし思う・どちらともいえない・あまり思わない・全く思わない

(バリマックス回転法)を行い比較検討した。有意水準は5%未満とした。

### Ⅲ. 結果

1. 障がい者スポーツのボランティア活動について  
アンケートの有効回答は、133名中119名(89.5%)であった。有効回答の内訳は、男子学生87名(87.0%)、女子学生32名(97.0%)であった。在学期間中で希望する障がい者スポーツへの関わりでは、「知識の教授」は $3.9 \pm 1.0$ 点、「実際に行う機会」は $4.2 \pm 0.7$ 点であった。また、今後在学中における障がい者スポーツのボランティアへの参加に対する希望は、 $4.0 \pm 0.9$ 点であった。障がい者スポーツへのボランティア活動について経験ありは6名(5.0%)、経験なし113名(95.0%)であった。

経験なしを対象とし、活動経験のない理由について問い正したところ、「機会がない」が $4.2 \pm 0.9$ 点で最も

高く、次いで「知識不足などで自信がない」が $4.0 \pm 1.0$ 点、「時間がない」が $3.9 \pm 1.0$ 点、「関心がない」が $2.8 \pm 1.1$ 点であった。「関心がない」は、他の全ての選択肢に対し有意に低かった( $p < 0.01$ )。

2. 障がい者スポーツのボランティアに対する参加動機について

障がい者スポーツのボランティアについての29項目は、適合度の検定より有意性が認められた( $p < 0.05$ )。この結果をもとに、障がい者スポーツのボランティアについて、固有値1.0以上、因子負荷量0.5以上の条件下では6因子、累積寄与率は55.3%であった。

各因子を構成する質問項目の内容より、因子Ⅰを社会貢献、因子Ⅱをスポーツ、因子Ⅲを他律参加、因子Ⅳを個人的興味、因子Ⅴを大会運営、因子Ⅵを報酬と命名した。

本研究結果においてボランティア参加動機は社会貢献がもっとも多く、次いでスポーツに関与する動機が

表3. アンケート回答者基本属性

項目	男子	女子	総合
対象者数(人)	100	33	133
平均年齢(歳)	$18.1 \pm 0.3$	$18.1 \pm 0.4$	$18.1 \pm 0.5$
回答対象者数(%)	87 (87.0%)	32 (97.0%)	119 (89.5%)
在学期間中で希望する障がい者スポーツへの関わり			
知識の教授(点)	$3.8 \pm 1.0$	$4.3 \pm 0.8$	$3.9 \pm 1.0$
実際に行う機会(点)	$4.1 \pm 0.7$	$4.4 \pm 0.8$	$4.2 \pm 0.7$
ボランティア参加希望(点)	$3.8 \pm 0.9$	$4.2 \pm 0.9$	$4.0 \pm 0.9$
障がい者スポーツボランティア経験について			
経験あり(%)	3 (3.4%)	3 (3.4%)	6 (5.0%)
経験なし(%)	84 (96.6%)	29 (90.6%)	113 (95.0%)

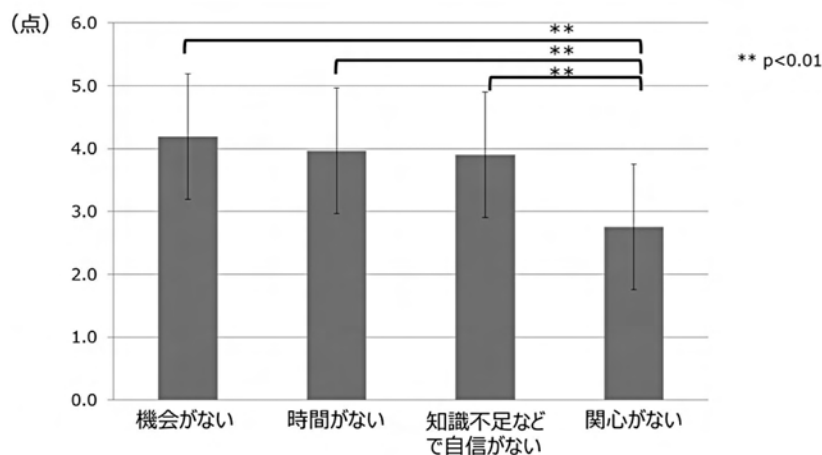


図1. ボランティア参加経験なしの理由

見られた。

#### IV. 考察

本研究結果において障がい者スポーツのボランティア活動への経験なしが95%を占めた。また、障がい者スポーツのボランティア活動の経験がない理由の選択肢では、「機会がない」が4.2±0.9点で最も高かった。ボランティア参加意識調査に関する先行研究では、医療従事者である理学療法士養成校の学生に対して、障がい者スポーツに関する意識調査を実施したところ、卒業後における障がい者スポーツへ関わっている割合が無し89%という結果であった。その第1の理由は「機会が無い」ことを挙げている<sup>2)</sup>。また、障がい者スポーツ実施環境に関する先行研究において奥田ら<sup>3)</sup>は、重度障がい者を対象に障がい者スポーツについての意識調査より、スポーツ施設においてコーチや指導をしてくれる指導員が求められていると報告している。これら先行研究より、近年障がい者を取り巻く環境は普及しつつある。しかし、障がい者スポーツの環境作りや機会の提供はまだ不十分であるため、障がい者スポーツのボランティア活動経験なしの割合が

多かったと考えられた。

その他、障がい者スポーツのボランティア活動の経験がない理由の選択肢である「関心がない」は、他の全ての選択肢と比較し有意に低く、また、今後在学中における障がい者スポーツのボランティアへの参加に対する希望においては、4.0±0.9点と高い点数であった。この結果から対象となる学生は、障がい者スポーツボランティア活動に対し「機会がない」、「知識不足などで自信がない」、「時間がない」などの理由を持つが、障がい者スポーツボランティア活動に関心はあり、学生の障がい者スポーツボランティア活動に対する意欲が高いことが考えられた。

学生の障がい者スポーツのボランティアに対する参加動機の結果において、「社会貢献」、「スポーツ」、「他律参加」、「個人的興味」、「大会運営」、「報酬」の6つの動機因子が抽出された。ボランティア参加動機因子に関する先行研究<sup>8,9)</sup>においてもほぼ類似した動機因子が抽出されており、本研究で確認された動機因子は障がい者スポーツボランティア参加の特徴を捉えていた。従来、ボランティアの活動はその特徴として無償性が挙げられ自己の利益に基づかない利他的動機によって行われるものとされてきた。しかし、自己

表4. ボランティア参加動機因子分析結果 (バリマックス回転, 固有値1.0以上, 因子負荷量0.5以上)

質問項目	固有値 (累積寄与率%)	因子I	因子II	因子III	因子IV	因子V	因子VI
<b>因子I : 社会貢献</b>	<b>4.14 (13.79)</b>						
活動を通じて社会の役に立ちたいから		0.71	0.10	0.19	-0.00	0.25	0.07
社会的な視野を広げたいから		0.66	0.14	-0.20	0.19	0.13	0.02
ボランティア活動に興味があるから		0.61	0.29	-0.25	0.15	0.21	0.02
自分自身が成長したいから		0.60	0.38	0.05	0.07	0.06	-0.08
多くの人と出会いたいから		0.57	0.20	-0.11	0.29	0.13	0.01
他の人の役に立ちたいから		0.60	0.34	0.06	-0.03	0.04	0.17
新しい知識や経験を得たいから		0.52	0.38	-0.35	0.07	0.03	-0.07
<b>因子II : スポーツ</b>	<b>3.93 (13.11)</b>						
スポーツに関心があるから		0.17	0.73	0.06	0.03	0.21	-0.00
参加者 (アスリート) に関心があるから		0.20	0.72	-0.19	0.26	0.12	-0.06
参加者 (アスリート) 活動を支援したいから		0.47	0.65	-0.06	0.09	0.27	0.06
参加者 (アスリート) と交流することが出来るから		0.42	0.63	-0.06	0.27	0.20	0.06
スポーツ活動を支援したいから		0.20	0.62	0.04	0.09	0.27	0.18
障害者に関心があるから		0.31	0.51	-0.19	0.21	0.34	0.10
<b>因子III : 他律参加</b>	<b>2.79 (9.31)</b>						
友人や知人に強く頼まれたから		-0.04	-0.05	0.78	0.15	-0.01	0.04
記念品などがもらえるから		-0.05	-0.10	0.76	-0.05	0.10	-0.44
競技団体より推薦されたから		-0.05	-0.11	0.62	0.21	-0.00	0.02
他の人に認めてもらいたいから		-0.01	0.04	0.55	0.17	-0.03	0.04
<b>因子IV : 個人的興味</b>	<b>2.34 (7.81)</b>						
ストレス解消になるから		0.07	0.13	0.26	0.79	0.07	0.04
気分転換になるから		0.15	0.15	0.21	0.73	0.23	-0.00
余暇時間を有効に活用したいから		0.14	0.16	0.12	0.55	0.13	-0.03
<b>因子V : 大会運営</b>	<b>2.18 (7.26)</b>						
プログラム運営に役立ちたいから		0.12	0.25	-0.05	0.13	0.82	0.03
プログラムに興味があるから		0.21	0.17	-0.21	0.25	0.63	-0.12
<b>因子VI : 報酬</b>	<b>1.21 (4.05)</b>						
何らかの報酬を得たいから		-0.01	-0.02	0.49	0.14	-0.04	0.86

に何かしらの見返りが期待できるためにボランティア活動に従事するという利己的動機の存在が指摘され、ボランティア活動の動機を利他的動機と利己的動機に概念的に分類されている。長ヶ原<sup>6)</sup>は、ボランティアの参加動機について「社会的ボランティア動機」と「個人的ボランティア動機」として分類している。またHenderson<sup>7)</sup>は、「愛他的動機」と「個人的動機」に二分し、「個人的動機」には「親和」、「達成」、「権力」の3要素に分類し分析した結果、「個人的動機」の9割は「親和」を占めたと報告しており、ボランティアの参加動機においては、「愛他的動機」が主要な因子であると報告<sup>6)</sup>されている。結果より、「愛他的動機」とも解釈される「社会貢献」が最も高い動機因子として13.8%の寄与率を占めた。また、動機因子Iの「社会貢献」の質問項目においても「活動を通じての社会の役に立ちたい」といった利他的動機思考が最も高かった。このことより本研究の対象となる学生の多くは、障がい者スポーツボランティアの参加に対し無償性の認識を持ち対応する人材であることが考えられた。しかしながら、「他律参加」や物的もしくは精神的な利益と解釈出来る「報酬」を求めた動機因子も抽出された。これらの抽出要因は、障がい者スポーツ指導員（初級者）取得条件である障がい者スポーツボランティアへの参加条件といった精神的な報酬の表れと考えられた。諏訪ら<sup>4)</sup>は、ボランティア・市民活動は、活動者にとって活動することそのものの大切さ、活動する人の楽しさや喜びなどに触れていると報告し、松岡ら<sup>8)</sup>はスポーツボランティアの動機について、仕事を積み重ねる事により動機に変化を生じると報告している。これら先行研究より、今後複数回のボランティア活動に参加することで、今回3番目に抽出された学校や友人など所属団体での勧誘や依頼などを背景とする受動的要素が強い「他律参加」の因子も薄くなり、自主的に参加する活動的要素が強い「社会貢献」や「個人興味」などの因子が強くなると考えられた。

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し、今後ますます障がい者スポーツに対する関心は非常に高くなると考えられる。しかしながら、障がい者スポーツに関わる機会が少ないのも現状である。よって今後より多くの障がい者スポーツを実施出来る環境作りをすることが必要であると考えられた。また、環境作りのみならず、障がいや障がい者に関する知識の教授を通じて今後の障がい者スポーツのサポートする人材育成方法や障がい者スポーツのボランティ

ア活動支援、広報活動等の検討が今後障がい者スポーツの普及活動に重要であると考えられた。

## V. まとめ

今回の障がい者スポーツボランティアの参加動機に対する意識調査結果より今後、障がい者スポーツの普及のためには、第1に障がい者およびボランティア従事者が定期的に参加出来る障がい者スポーツの環境作りや機会を与えることが必要である。

## 参考文献

- 1) 井上由里, 北山 淳, 里内靖和: 障害児スポーツ・レクレーションに対する意識調査. 神戸国際大学リハビリテーション研究, 1, pp.91-96, 2010.
- 2) 井上由里, 廣岡幸峰, 十田朋也, 南場芳文, 成瀬 進, 小枝英輝, 後藤 誠: 障害者スポーツに関する意識調査の結果. 神戸国際大学紀要, 82, pp.83-89, 2012.
- 3) 奥田邦晴, 樋口由美, 増田基嘉, 林 義孝, 南野博紀, 山西 新, 灰方淑恵, 喜多あゆみ: 重度障害者を対象にした障害者のスポーツについての意識調査. J RehabilHealth Sci, 4, pp.11-21, 2006.
- 4) 諏訪 徹: 地域福祉とボランティア・市民活動. 地域福祉研究, 30, pp.38-49, 2002.
- 5) 田引俊和: 障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究. 医療福祉研究, 4, pp.98-107, 2008.
- 6) 長ヶ原 誠, 山口泰雄: スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2) -ボランティアの継続的意欲の視点から-. 鹿屋体育大学研究紀要, 6, pp.69-75, 1991.
- 7) Henderson, K. A.: Motivations and selected characteristics of adult volunteers in Extension 4 -H youth programs in Minnesota. National Recreation and park Association congress, 1979.
- 8) 松岡宏高, 小笠原悦子: 非営利スポーツ組織を支えるボランティアの動機. 体育の科学, 52(4), pp.277-284, 2002.
- 9) 松本耕二: スポーツ・ボランティアの類型化に関する研究-障害者スポーツイベントのボランティアに着目して-. 山口県立大学社会福祉学部紀要, 5(1), pp.11-19, 1999.